
商店街にて

誠次郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

商店街にて

【Nコード】

N5088F

【作者名】

誠次郎

【あらすじ】

結婚十年を過ぎた静子は、ひょんなことから商店街に足を運ぶことになった。そこは、いたるところでシャッターが降りた暗い洞窟のようだった。そこで静子が出会ったものとは・・・

「もうすぐ御義母さんの七回忌だわね」

静子はうちわで顔をあおぎながら夫の義雄にいった。

義雄をネクタイをしめながら、

「来週の土曜日だったな。早いもんだな」

といった。

「そうね。ところで、今夜は遅くなるのかしら」

と静子は夫にたずねた。義雄は、まっすぐ帰るよと云いながら、スーツに袖を通した。

静子は夫を送り出すと、一通り家事をすませた。それから、買い物に行く準備を始めた。

いつも静子は買い物に自転車で隣町のスーパーまで出かけていった。歩いていける範囲には商店街もあったが、六年前に隣町に郊外型の大きなスーパーができてからは、もっぱらそこで買い物するのが静子の日課だった。

その日、静子は買い物途中お金を引き出しに郵便局に寄った。自転車を郵便局横の自転車置き場に止めると、静子は郵便局のキャッシュコーナーへと向かった。

運悪くその日はＡＴＭの調子が悪いらしく、機械に差し込んだキャッシュカードが何度も戻ってきた。係りの者を呼び調べてもらったが、カードの磁気がおかしいということらしい。

静子には良く分からなかったが、新しくキャッシュカードを作り直す必要があるとのこと、

再作成には２０分程度かかるとの話であった。

静子は「ついてないわねえ」とつぶやき、待合コーナーの席に腰を下ろすと手近に置いてあった雑誌を読み始めた。

手に取った雑誌には子供服の特集記事が組まれていた。色とりどり

の小さな服が写真で可愛く載っていた。

静子は小さくため息をついた。結婚して10年が経つが、静子と義雄の間に子供はいなかった。最初は亡くなった姑と3人暮らしで、子供を作るのを何となく遠慮していた。

姑は亡くなる前に、しきりに孫の顔を見たがっていた。

それでもなぜか二人に子供は授かることはなかった。

その姑も亡くなってから早や七年が過ぎていた。

静子には、この一〇年間は平凡で何もない結婚生活だと思った。

やがて、係りの者が戻ってきて、静子に新しいキャッシュカードを手渡した。静子は必要な分のお金を降ろした。

郵便局を出て、駐輪場に戻ってみると静子の自転車が消えてなくなっていた。

周りを見渡したがどこにもなかった。

盗まれた。

買ってから六年になる自転車だった。

他人には盗む価値のあるような自転車には思えなかった。

他にもきれいな自転車が何事も無かったかのように無口に並んでいた。

しかし、静子にとっては大事な自転車だった。買い物には欠かせない足だった。隣のスーパーまで歩けばゆうに30分はかった。

この炎天下の中30分も歩く元氣は静子にはなかった。

静子は、重い気持ちを抱えたまま、スーパーとは反対方向の道を歩き出した。

とぼとぼと歩いていると、地元の商店街が見えてきた。商店街は屋根付きのアーケードがついていて、昼というのに薄暗くぼんやりと口をあけて数少ない客が来るのを待っていた。

暗い口の中では、ところどころ櫛の歯が欠けたように店がたたまれてシャッターがおりていた。

静子は商店街で買い物しようとして歩いてきたが、入り口に立ってみ

るとより憂鬱な気分になり、足が踏み出せなかった。静子は少し先にあるコンビニへ行くことに決めた。

「何だ。今日もコンビニ弁当か」

義雄はうんざりした様子で食卓に並べられたお弁当を見て、いった。「仕方ないじゃないの。自転車が盗まれちゃったんだから。そんなにいうのならお昼のお買い物は、車で乗せていってくださいな」

静子は反発するようにいった。

義雄は、眉間にしわをよせて

「仕事中だろう。抜けてくるわけにいかないよ」とつぶねた。

「あら、以前御義母様がいらした時は、お昼は家で食べてらしたじゃないの。少し早めに戻ってきてお買い物につきあって下さればそれで良いですよ」

静子はお茶を入れながら、いった。

「商店街なら歩いて行ける範囲じゃないか。昔の話というのなら、お前だって母がいた時はよく一緒に商店街で買い物してたじゃないか」

「あなたは最近あそこの商店街にいったことないでしょう。今じゃ誰もあんなところにいたりしないわ。それにだいいち暗くて不気味なんですもの」

そういえば義雄はここ数年地元の商店街にいったことはなかった。休日も妻は、スーパーだ、ショッピングセンターだといって、車で遠出させられていたことを義雄は思い起こした。

六年前に隣町にスーパーができてからは、妻は自転車で一人で買い物に出かけていた。

その頃から義雄も商店街に行くことはほとんどなかった。

「よし、じゃあ今度の休日に二人で商店街にいつてみようか」義雄は妻に提案した。

静子は暫く黙っていたが、

「さつ、ご飯にしましょう」
とだけいった。

静子と義雄は、だまって弁当を食べ始めた

何日かして、静子はひとりで地元の商店街に行くことを決した。
何年ぶりだろう、商店街で買い物するのは。お姑さんが亡くなっ
てから十年。

それ以来この商店街にはいつていない。
久しぶりに歩いてみると、薄気味悪いと思っていた気持ちはなくな
り、懐かしい気分になった。それだけにかつては開いていた店の多
くが、シャッターを下ろして閉まっている光景は胸にぐつとくるも
のがあった。

それでも店を閉じずにがんばっているところもあった。代替わりを
している店もあった。

まだ現役でがんばっている豆腐屋のじいさんもいた。なんだかとも
懐かしい。

「よう久しぶり。元気かい」

と声をかけられた。

とても嬉しい気持ちになった。

代替わりをした店では若大将が、

「こんにちは、鈴木様」

と声をかけてきた。

静子は「あらっ」と声を出した。

隣のスーパーで魚屋をしているのと同じ若い男がそこには立って
いた。

「うちは、元々こちらが本店だったのですが、今じゃあちらのス
ーパーで商売をさせて頂いております」

といって若大将はぺこりと頭を下げた。

「店はぼろいですけど、中味は新鮮ですよ」

といって、かれいやさんまなどの魚を見せてくれた。

その日、静子は商店街を端からはしまで回った。お姑さんと買い物をして歩いた頃を思い出しながら。いくつもの懐かしい顔に会った。帰りに商店街でもらったくじを持って、広場のくじ引き会場へ立ち寄った。

当たった！なんと2等賞。自転車だった。静子は満面に笑みを浮かべて当たった自転車に乗ってもう一度商店街の中を端から端まで、子供みたいにはしゃいで走った。

自転車の買い物かごには、商店街で買ったお惣菜やお菓子でいっぱいになっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5088f/>

商店街にて

2011年1月5日03時13分発行